

特集 全国分水嶺（界）サミット



上・下流域の役割を再確認

第六回全国分水嶺（界）サミット

第六回全国分水嶺（界）サミットが、九月九日と十日の両日、高森中学校体育館で開かれました。

高森峠から大戸の口にかけて分水嶺を抱える本町は、真の水の源である水源地域に所在しています。水源地域が果

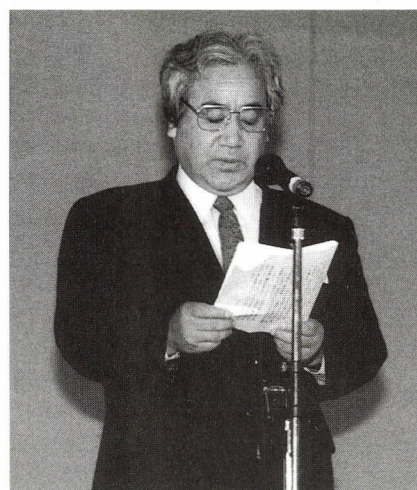
している役割は、水の出発点としての地下浸透・土砂流出防止・豪雨時の水害防止・大気浄化機能など、人間生活に對して大きな大きな影響を与えてきました。

そこで、「水源地域の役割・下流域の役割」をテーマに



約1100人が参加した分水嶺（界）サミット

掲げられたサミットでは、今一度水源地域の持つ下流域への公益性を考え、水源地域の保全は全国民の義務



共同宣言文を読み上げる今村町長

であることを確認し、その保全対策について考えようというものです。

北は北海道から南は沖縄まで、約千百人が参加したサミット初日は、評論家の富山和子氏による基調講演「水と日本文化」が行われ、「森林は、森を作る・水を涵養する・野鳥を育てる・山肌れを防ぐ・大気の浄化など色々あります。が、森林の大事な理由は、水は土の産物であるということ。その土壌の形成者が森林です」と、水を守るための森林の重要性について講話がありました。

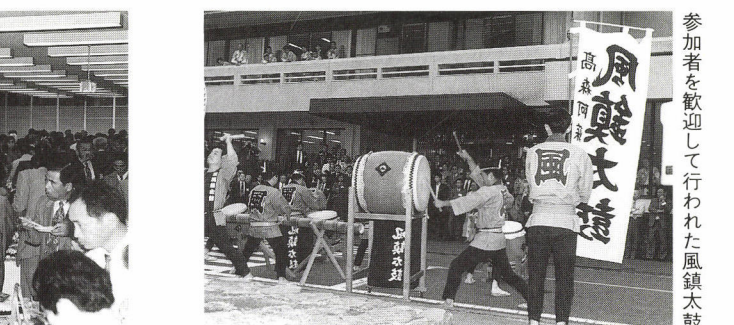
続いて、広島県水源の森基金から「水源地域における森林の役割」、菊池川流域同盟の

流域二十市町村が十九カ条の統一条例を作り、上流下流が一緒に菊池川の浄化に取り組むなどの事例発表が行われました。

この後、白川の最源流に位置する高森トンネル湧水を視察。会場を南阿蘇国民休暇村に移して、歓迎レセプションが行われました。



高森トンネルの湧水を視察する参加者



参加者を歓迎して行われた風鎮太鼓



交流を深めた歓迎レセプション



パネルディスカッション

テーマ

水源地域の役割・ 下流地域の役割

第八回全国分水嶺(界)サミットが九月九日・十日の二日間、高森中学校体育館で開催されました。本号では、光岡明氏の司会によるパネルディスカッションを要約してお伝えします。

出席者

コーディネーター

光岡 明氏

アドバイザー

富山 和子氏

パネリスト

甲斐 重勝氏

中村 幸子氏

永屋 武典氏

特集

全国分水嶺(界)サミット

感覚の違いが良くわかります。

ことに東京は、大多数の世論を形成する人が集まっているわけですから、意識の無い人達に皆さんの状況を教えて行くには、何倍か声をあげなきゃいけません。

先程、熊本市の水辺の景観の話がありました。そういう試みは、水と接し上流へ目を向ける。まずは、自然と接しなければならぬ。そういう意味で都市に水辺があるという事は、入口の入口で大事なことです。私は意義付けています。

それで、最終的には都市の人が山村のことをわからなければいけないんですが、今大変掛け離れています。

三年前くらいに、割り箸パッシングで、山村の方々の気持ちが傷付けられたと思います。割り箸パッシングの最中に、毎日新聞だったと思いますが、一面に大きな紙面で割り箸パッシングでなく使おうという逆の方、いわば林業の皆さんの立場に立った記事が大きく掲載されました。山村の立場にたった、割り箸を使おうという記事だったんです。

新聞社に電話で反響を聞きました。反論はあったそうなんです。林業の方からの電話とかハガキはなかったそうで、残念がっておられました。

この記事は良かった、その通りだ、これは違うといった反響でマスコミは、どちらが正しいか決まるんです。山村の声をマスコミに働きかけていただきたいと思います。

例えば、スギ・ヒノキの樹木の問題ですが、スギの植え過ぎとかいう議論があります。しかし、それを林業内部の方が、これからどうしようという反省なさって色々研究なさるなら、私は大変結構なことだとおもいます。

だけど、スギ・ヒノキを植え過ぎたという、マスコミにスギ・ヒノキを批判するようなムードが起こります。非常に残念なことです。

しかし、敗戦後の荒廃した日本列島の山村の方々がスギ・ヒノキを植えてこられたから回復でき、山や水が作られてきました。スギ・ヒノキでお金になると思うから、経済活動だからこそ希望を持ってやれたんです。食べて行けなく

くてやれるはずがないんです。日本人とスギとの関係は、お米より古く一万年近いわけなんです。今までやって来たことには、自信を持っていたいて、おかしいことがあったら違うんだと、胸を張って堂々と反論していただきたいと思います。

最後ですけど、このような集まりが出来たことは、本当に心強いと思います。分水嶺を持つ自治体は、このパンフレットを見てもたくさんあります。

どうかこの組織を広げ、山村ではいろんな催しがあるでしょう。その力を一つに寄せ合うような方向に、是非お考えいただきたいと思っています。これは、今後の課題としてお願いします。

光岡 どうも富山先生ありがとうございました。私自身頭で考えていたことと、今日現場のご意見をお伺いいたしまして、いかに私達がいかげんであったか都会の人間として痛感しております。

今日は、長い間本場にぐくろうさまでした。これで今日のシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。

分水嶺(界)サミットを終えて

高森町長 今村 博信

第六回全国分水嶺(界)サミットも火の国阿蘇、野の花と風薫る郷、高森町において二日間の日程で開催し、盛会のうちに終了することができました。これは、国土庁をはじめ関係各位のご理解とご協力の賜であり、衷心より厚くお礼申し上げます。

水は人間の命ならず全土の生物の命の源であります。また、私も国民の日常生活や産業を支える重要な資源であるとともに、それぞ

れの地域の自然・風土と歴史・文化を育み、人間形成の環境づくりにも大きな役割を果たしています。

しかし、水源地域の人々の理解と協力が不可欠であり、同時に下流地域の人々の水源地域に対する感謝の気持ちと連携の姿勢が必要であります。

近年では、地球規模の環

境変化により、水供給の安全度の低下が懸念される状況から、安全で美味しい水への志向が強まると共に、水の環境機能を生かした親水空間への関心が高まっております。

この様な水の持つ多目的な機能を活用して、豊かで潤いのある社会を築いていくことが二十一世紀に向けての最重要問題となっております。

前述のように、水は私たちの生活に欠かすことのできない貴重な資源であります。

今回の全国分水嶺(界)サミットを契機として、水資源の利用者である国民の皆さんが毎日の生活の中で水の貴重さを考え、水を手に使う工夫を凝らしていただき、安全で美味しい水のある豊かな暮らしを目指していただきたいと思います。

います。

米過剰のことが言われまして、水田面積の1/3が、現在転作を余儀無くされておりま

す。ご承知のとおり、日本の水田の保有する貯水量を例え

ますと、一九六三年だったと思いが、黒部ダムが、当時の金で五百十五億円の資本を投資し建設されました。

会場全体による パネルディスカッション

光岡 只今から「水源地域の役割・下流域の役割」というテーマでパネルディスカッションを開いてまいります。

パネルディスカッションとい

いますと、パネラーの発言が

けです。

そういう状況の中、今回のサミットの水問題は、日本を

含めた米問題、自由化の問題も国内で話題になってい

自然を守るというよりは まず人間を守る

富山 余り時間がないよう

でございすが、少し時間を

頂き、大事な事を申し上げ

たいと思います。

地域の活性化と 水文化の交流を図る

今村町長 只今、光岡先生



コーディネーター 光岡 明氏

昭和7年11月3日生れ、昭和30年熊本大学法学部卒業。熊本日日新聞社文化部長・整理本部長・編集局次長・論説副委員長・熊本日日新聞情報文化センター代表取締役社長を歴任。現在、熊本近代文学館館長。第20回熊日文学賞、小説「機雷」で第86回直木賞受賞。

分で責任を持つという思想が、江戸時代の人々にはあったわけ

です。本来ですと、下流の都市の人は上流へ行

って、自分でそこへ住んで、一生懸命水を

を作らなければならぬ。それを今はやって

いないんです。

明治以降、水は知らない間に自然物に

されてしまいました。ことがわかって

いたので、上流に対してそれなりに対応

していただきました。自然物となった今では、タダで出てくる。地下水もタダだと思

っている感覚が日本中の常識になってお

ります。

えて果物を作れば、お金を出して買っ

ている。水はそうじゃない。おかしいん

ですが、これが現実です。

それをどうするかというところ

が、この前はダメでした。今は少し違

うと思うし、私も林野庁長官に、「何

度もお出し下さい。それ自体がアピールになるん

じゃないですか」ともうしあげたことがござい

ました。

ところが、山村というのは水を作っ

ていることがまだ出ておりま

せん。

ただ、世の中少しずつ変わ

ってきております。宮崎県では、国土保

全奨励金制度という新しい制度を作

られました。

例えば、今までの文部省の奨励金は、高

校生一人に月額一万一千円でした。宮崎県で今度発

した制度では、卒業してまた山村に最

低五年もどれば五万八千円、そ

ういう条件が付かない場合は三万八千

円になります。文部省もび

っくりされたそうです。そういう制度が

出来たのは一例でござい

ます。

今まで考えられなかったこ

とが、どんどん進められて

行く。それだけ皆が緊迫した状態を感じ取

って、行政から始め、世の中が動いて

いると思います。

私は、そういう意味で今日は大変きびしい

お話をしましたけど、たけど、何もしな

ければ何も動かないわけ

でして、希望を持って状況をご報告致

します。

でも、都市と山村の感覚がこんなに

掛け離れている。私は、東京と山村

各地の間を行ったり来たりして

いますので、

ない状態に陥りました。そこで、自衛隊

派遣を要請して生活用水確保のための

活動をしていただき、不自由な生活を

免れたわけです。町人口の約半数の方



高森で分水嶺（界）サミットを開催するに至った経緯を述べる今村町長

しかし、私はそこにモラルが無いような気がするわけです。この上流地域が病めば、下流地域の水も病みます。

それではどうするかということになりますが、一人ひとりが日々の生活の中で考えなければならぬし、暮らしの中で実践することが大切であると考えております。

昨年、私も岩手県安代町で開催された第五回分水嶺サミットに参加させていただきました。その時に、過疎など色々悩める事態がたくさんあるという事で、分水嶺（界）市町村がこれからも力を付けて、より良い水文化を作っていくかなければならないということに感銘して帰ってきました。本当に有意義な勉強をさせていただきました。

そして今回、

「水源地域の役割・下流地域の役割」というテーマを提起させていただき、地域活性化並びに水文化の交流を図りたいということで企画いたしました。

光岡 個人的な事情から始まって政策に至るまで、あるいは近代の文明に対するお考えまでお話しいただきありがとうございます。

今最上流からの話ができました。そこで最上流で森を守って、非常に実績を上げておられます宮崎県諸塚村長の甲斐重勝さんにパネラーとしてのご報告をお願いします。

林業の担い手不足が今後の重要課題

甲斐 水源地の役割という

色々な面で大変理解され、いい方向に向いているなど感じています。

これから、水源地域のコストあるいは森を守るためのコストを、どのように国民が負担すればいいのか、国の政策に折り込んでいただければいいのか、それぞれの市町村で悩んでおられるのではないかと思います。その辺を今日のパネリスト、アドバイザーの先生方から、社会に訴えていただきたいと思います。

（高鷲村長） 大変貴重な時間でございますが、岐阜県の高鷲村です。

先程から、源流から下流までのつながりの話がございましたが、私共の村でやっております事例を紹介申し上げます。来年は、私



源流地域で一番最初に下水道を設置したと語る高鷲村の村長

共の村と県下の最下流、長良川河口近くに海津町、平田町という町があります。その婦人会を中心とした人々に私共の村

この立場ですけれども、私の発言が山村の立場・山村の役割、そういう事が水源地の役割ということになるかと思うわけでございます。ですから山村の主體的な役割というの、高い公共性を持った活力ある森林を守り、育てることが私共の仕事だと私はいつも思っています。

そういう点から申し上げまして、山村現場で緊急かつ最大の課題は何かといえます。森林の担い手の育成であるとうと理解をいたしております。従って、平成二年に国土保全森林作業隊というようなものを発足させております。



パネリスト 甲斐 重勝氏

昭和7年生れ。諸塚村議会議員・議長をへて現在、諸塚村長（4期目）・郡町村会長・国土保全奨励制度専門委員・宮崎県フォレストピア実行委員会副会長。諸塚村の特色を生かした林業立村をめざす村づくりを展開中。

環境の条件の村の一つであります。しかし、住めば都でございまして、そこが私共にとりまして一番安心して住めるいいふるさとだと思っています。村土の面積が百八十七平方メートル、そして林野率95%でございます。人口造林率が86%です。その人工林面積の内訳は、スギを中心とした針葉樹が約七割、それから後の三割が椎茸を生産いたしますクヌギの原木林。いわゆる七対三の割合で適地適木で植栽されております。昭和六十年本村が朝日森林文化賞を受賞いたしました時に「モザイク模様の林層だ」と、朝日新聞で紹介いただきました。それから、諸塚の森はモザイク模様だと言われています。針葉樹の一斉林



水問題に関する深い米問題について発言される桐原郁雄さん（高森・上在）

を視察していただき、源流をご理解いただいております。また、私共の村からも出向き、下流の皆様の水害の悩みとか、下流の生活様式を相互に訪問して、交流を深めております。先程からのお話にもありましたように、上流と下流の住民の心の触れ合いを持つことが大事ではないかということ、ご披露申し上げます。

ちなみに、村では観光対策も行っております。そういう関係から村有林は約五百ヘクタールありますが、二十年前にその中の三百五十ヘクタールは禁伐条例を制定しました。これは、山の水を守るということが我々の使命であるということで、三代前の村長が発案しまして村議会にかけて、永久禁伐という厳しい条例を作っております。

この条例によりまして、村民の過半数の同意がなければ絶対木を切つてはならない。但し、山に手をかけなければ荒れますので、この禁伐の山も村有林として、しっかりとした手入れをしております。下刈りから間伐に至るまで相当な費用がかかります。手入れをして永久的に守ろうという姿勢を村民に植え付けることによって、下流の皆様にもご理解を賜りたいと思います。村としてもそういう姿勢を貫きたいという条例の制定です。

また、源流地域第一号で下水道を設置いたしました。これは、建設省の方々に無理を申し上げまして、突貫で行いました。わずか人口六百人足らずの所でございますが、観光地ですので、約一万四千人の観光客が訪れます。約二十億円の費用をかけて設置、今年から一部供与致しております。来年、おこしいただければ、ご視察いただきたいと思います。色々申し上げましたけど、上流と下流の結び付き、源流域に生活する人の姿勢ということも考えているということ、ご理解いただきたいと思います。

光岡 どうもありがとうございます。そろそろ時間が無くなって参りました。（会場から発言者あり）

発言ですか。それでは、発言をお願いします。

桐原 高森町の桐原と申します。先日から今日にかけて、日本は古来から水穂の国と言われます水の問題につきまして、皆様方から水をきれいにしようということで、色々ご提言がございました。私も農業者の一人であり、稲作、施設園芸、山林経営の複合経営を行っている者として、視点を水田農業を見直していただきたいという意味で、水田の立場から発言させていただきます。

この林道により、造林、除間伐、下刈り作業、あるいは椎茸の生産活動、時によって林野火災が発生した場合でも、ただちに消防団が駆け付けて大事に至らないような火災で済んだ事例がいくつもあります。

ではございませんで、災害にも強い森造りだという評価もいただいております。それからもう一つ、諸塚村が全国の山村の中で最近少し名前を知っていただくようになりました背景には、日本一の高濃密道路網のことがあります。今、公道を含めます村内密度は、約五十メートルを越しております。この前、京都の会議でその事を申し上げたら、ある農業土木の関係者の方が「農道並の密度だなあ」と、おっしゃいましたけれど、大変に丘陵な地形に於いて五十メートル以上の林道密度が入っております。

になさっておられます。そういう中で感じるのは、行政側が把握していない団体、経済団体など農業団体に属していない人達に、どうやってアプローチして水の大切さ、環境を守るということを訴えていけばいいのか、日頃感じております。

私達も、小さな主婦のグループではありますが、六年前に『環境を考える会』というのを結成しました。一番目に、家庭排水の問題に取り組みました。川の汚染は、工場排水ではなく家庭排水だというところで、色々と訴えて来ましたが、家庭の取り組みと行政側の汚水処理のシステムを同時進行で整備して行くというのが、非常に重要だと思えました。

特に水が流れる上流地域に行きまして、川に魚がいなくなったという話を、いろいろな人から聞きました。「じゃあ、合併浄化槽は付けていらいっしやいますか」と伺いますと、付けていないという答えが返ってきます。

都心部当たりでは、非常に高価な下水道というのは採算

が取れると思いますが、農村集落、山間部といったところでは、合併浄化槽の方が手軽で普及しやすいのではないかと思います。汚水処理システムの問題におきまして、下水道は建設省、浄化槽は厚生省になります。ですから、どちらを選ぶかは、市町村が選択されると思います。

富山先生の話に、上流域から取付けていくのが当然だと言話がありました。やはり、生活していくには快適環境で暮らしたいと、日本国民全員が願っていることです。どこで社会資本が進んでいるかというと、今では都市域が進んでいるものから、その地域に流れてくるというのがある意味で当然のことではないかと思えます。



第5回サミット開催地岩手県安代町の北館町長

山間部でも、是非そういった社会資本の整備を進めていただいて、合併浄化槽を国・県の補助を受け、取り付けていただきたいと思えます。

今日の会議を聞きまして、この山村の人達が山を守り、水を作ってくださるからだと言痛感しました。もっと、下流域の住民が何をしなければならぬかを考えて、上流域と下流域住民が交流し、実際に下流域の住民が山を歩いて、現場を見るところというのが非常に大事なことでないかと感じました。

光岡 どうもありがとうございます。

ここで、会場からどなたでも結構ですから発言していただけないでしょうか。

北館（安代町長）

第五回サミット開催地の岩手県安代町の岩手県安代町です。

実は、第五回サミットの際パネリストに漁業者を一人お願いしました。私は、事務局がなぜ漁業者に依頼した

のかと思っていました。今日の色々お話を聞いて、いろんな関連性があるとわかりました。

漁業者の方から、森は海の恋人ですという発言がありました。森は海の恋人とは、何のこともないと思っていたんですけど、森が健全でないと魚が死に魚が育たないと言っておられました。健全な森がないと、栄養のある水が海に流れない。あるいは、海の魚の栄養となる昆虫類、浮遊物が海にながれないということでした。今日も天明の会のお話を聞きまして、まさにそのとおりだと感じました。

水源地域の役割あるいは下流域の役割が、恋人のように結ばれていると感じたわけ

です。先程、熊本市の話がありました。大変地下水が豊富で不自由していないということで、水源地域に対するご理解が随分あるようでございます。岩手県もこうなればいいなと思っております。

今、森林は大変悩んでおります。先程からたくさんの方々が、先程からたくさんの方々が、造林はするけれど後継者不足

あるいは高齢化が進み、管理が行き届かない状態です。このまま放置しますと、せっかく植林しても、天然雑木に制覇され、全く役に立たない原野になってしまわないかと、悩んでいるわけです。

私も、約百坪の山林を所有していますが、働いてくれる人がいないということで、森林組合に頼みますと金がかかり、山にコストがかかるわけです。諸塚村長さんからお話のとおり、管理する林道を通すとコストがかかります。できるだけ下流にいい水を流そうということで、合併浄化槽や農業集落排水事業をやっておりますが、これにもコストがかかります。

このコストは、我々山村の者が負担しているわけですが、下流域の方々もこのことについて理解をしていただきたいと思えます。先程、水源税・森林交付税の話がありました。山村の交付税の話も聞いており、ある程度、国家的に制度化されないものかと思えます。熊本市では、基金を設けて周辺の方々に補助金を出されているという話を聞きました。

雨や台風が来た時は大変なことになって、下流域に大きな影響が出て来るのではないかと意見があります。

このことで私は是非ご理解を頂きたいのですが、一時期『カラスの勝手だ』という言葉が流行しましたけれど、木を切ったり、木を植えたり、道を付けるというのは、山村の勝手でやっているのではないのです。私は、体験を通じてそういうご理解を頂きたいのですが、戦争が無かったならば、私の人生も随分変わったろうと思えます。

昭和十八年の大晦日に、父は海軍でしたが、船と共に沈んでしまいました。私は一人っ子でありましたので、十六歳の時から好むと好まざるにかかわらず農林業の道を歩まねばなりません。それからずっと昭和五十四年村長になるまで、自営の農林業で諸塚村の山の中で生活をしていました。

その当時のことを考えて見ますと、電気も無ければ自動車も無かったわけですから、まさに原始的な生活の中で少年時代を送りました。その折

りの山村の状況は、昨日富山先生のお話にありましたように大変な荒廃の状態でした。残っている天然林というのは、焼畑にして私たちの食料を与えていただいたものです。当然のことながら木を切つて恩恵を受けていますので、感謝の気持ちを持って木を植えてまいりました。そして、人間の欲かもしれないですが、同じ植えるなら経済性の高い森を造ろうということで、針葉樹中心に人工造林が進んでまいりました。我が国の人工林の姿だろうと思えます。

そして、なおかつ残っております。天然林は、一時期パルプが大変高い値段をしていたために、私達が山林で生活するために所得がなければなりません。パルプとして木を切つて出したわけです。そして、その恩恵を受けておりますので、その後山を造つてお返ししなきゃ山の神のバチが当たると、祈りにも似たような気持ちで自分の代では金にならないであろう造林を続けて来た経緯があります。

そして、山から切り出されたパルプ材、それから変わった

た紙、そういうものの恩恵を受けたいと言いつける国民が誰一人いらつしやるでしょうか。

山村において生活をし、高度経済成長の過程の中で、どうしても山を切らなければならなかった。そして植えなければならなかった。そういう背景があることを理解頂きたいと思えます。

今、労働力が都市部に集中しています。従って、山村は担い手を失っております。もし、このままの状態が続くならば富山先生のお話の中にもありましたように、大変な事態が起きるのではないかと思います。

このことは、木を植えた、人工林を植えたということが悪いのではなくて、先生ご指摘のように、それを守らなければならぬ担い手まで、山村から奪い取ってしまったという我が国の社会のしくみの中にこそ、私は責められる問題があるのではないかと思います。

言い換えれば、大変勝手ではありますが、国民全体の責任が今日の森林、山村の状況を生み出しているということ

理解していただけないでしょうかと思えます。

泣きごととは申しません。私は、山に育てられて今日があるわけですから、数少ない村民ではありますけど、村民と共に力を合わせて、すばらしい森林を育てて、そして次の世代に送る役割が人生・生涯をかけての勝負であるという気持ちで、いま林業立村を目指して一生懸命に取り組んでいるところです。

立場が違いますと、色々とお批判ご意見もあるうかと思えますが、皆様のご指導ご鞭撻を頂きながら一生懸命に頑張る、いつまでも立派なおいしい水が飲めるような森林を育てて行きたいと思えます。それが山村の役割だと考えております。時間の関係もございいますので以上で発言を終わらせていただきます。

光岡 ありがとうございます。

富山先生の実践版という感じで聞いておりました。担い手がなくなるといふのは、最大の問題だということ。私は私たちが本では知っておりますけれど、こういう話を聞きますと、まさに今、危機が

迫っているんだなという感じを強くいたしました。

いま、高森町長さん、諸塚村長さんお二人から、最上流の山と森に対する取り組みと心構えが出ました。他にもこの最上流でさまざまな取り組みをなさっている町村があるだろうと思えます。会場からご発言を賜りたいと思えます。いかがでしょうか。産山村長さんが見えと思えますので、会場からご発言をお願いします。

畜産農家の減少は 草原の荒廃を招く

井山産山村長

私の村は、阿蘇外輪山の北東部に位置しております。山林原野が村で占める割合が72%でございます。水が大変豊富で、日本名水百選の池山水源の外水源が三カ所あり、いずれも大野川の源流になっております。

只今私共が抱えております大きな課題は、諸塚村長さんの方から話がありました。この山林と阿蘇の草原をどうして守って行くかということが大きな課題であります。産山村の山林のほとんどがスギ

山でありまして、植え付けまして二十年から三十年の山がほとんどです。この山の間伐が遅れております。今立っている木を半分位にしないと、立派な山になりません。けれども除間伐がなかなか進まない。こういった除間伐には、国の補助事業がございまして、その補助金に村の予算をわずみして、森林組合と一緒に一生懸命やっていますが、なかなか事業が進まないというもどかしさがあります。

それと、草原が荒れております。これは畜産農家が段々と減っているからです。畜産と阿蘇の草原は深いかかわりあいがある訳です。これは皆様もご承知と思いますが、春に野焼きを行い、草が生えますと放牧して、秋には草を切って乾燥させて、家畜のエサにします。そしてまた、春には野焼きをするといったサイクルがあります。

畜産農家が減少するということは、野焼きをする者がいなくなるということです。そこで、畜産農家の振興にと畜産農家には利子補給をしたり、補助金を出したりと、対策を

ます。

しかし、手を掛けなければいいというだけでは、私共の体験から言いますと、山は守れないという気がします。先程申し上げたように、一千万戸に及ぶ人口林の問題など色々議論があるかもしれませんが、現実には人口林が出来ていて、植えたのが悪いのじゃなくて、植えた山の適正管理をしなくてはならぬものを放置しているところに、問題があると思います。その適正な維持管理をする林業の担い手がいなくなっていることです。これは、一つ大きな課題だというふうに理解をいただきたいと思えます。

昨日、役場を発つ前までに台風十三号により崩壊した山地の集約をしましたが、約五十分の被害が出ていました。その中には、県の品評会に出して立派に手入れている山が、上から崩壊している状況もあります。これでは、林業に対する意欲が減退するのではないかと心配しております。

ところが、冷静に考えてみると、この台風が来たことによって、自然というのは人間



井山 産山村長
会場から草原の荒廃を訴える

講じておりますが、なかなか歯止めがかからないというのが実態です。十年後、二十年後、どうなるのか大変不安なところでは。

それから河川の汚れが大変ひどくなっております。これには色々原因がありますが、家庭から出る雑排水が主な一つです。

農林水産省の補助事業で、農業集落排水事業という事業があります。これは、ある程度家が集中していないと、工事費が高くつき、維持費も高くなります。産山村のように家が点在しているような地域では、この補助事業に取り組みません。

そこで、合併浄化槽の設置を進めております。これも、家が離れておりますと流末処

理の工事費が高くなったり、トイレを改修したりしなくては行けませんので、かなりの自己負担となります。しかし、現在五〇〇戸の農家の中で、約一五〇戸が合併浄化槽を設置しております。今後、全戸合併浄化槽を取り付けるように努力していきたいと思っています。

また、最近では生活が非常に豊かになり、生ゴミの処理が田舎でも問題になっております。産山村では、生ゴミを収納して堆肥として土に還元する、コンポストというポリの容器を、農協にまとめて斡旋してもらい、村で価格の1/3を助成し各戸二個づつの割合でほとんどどの家庭がそなえているので、生ゴミの処理については今のところ問題はありません。

こういった施策を進める場合、地域住民の理解と協力が必要です。村では、四つの地区からその地区の推薦で男女一名づつを選出してもらい『産

ばならないと考えております。

それと同時に今回の台風災害の状況を見ますと、諸塚村で記録されましたものが、時間雨量82mmでございます。降雨とか風速四十から五十

の風がもろに森林に当たった場合、山に何を植えていようがしかたのないような、災害の原因があるわけです。これも、自然が人間の勝手だけで開発を進めて行くと、こういうことがありますよと

教えているような気がしてならないわけです。確かに、雨や風に対しては、天然林よりも針葉樹の方が弱いというのが、災害現場を見た場合の実感です。

私共は、災害を受けた後には災害に強い樹木を、現在植えております。そして、集落の広範になる危険地帯には、杉の造林を切つて竹林を育てていき、安全性を高める。そういう自然の教える教材に

しながら崩壊の無い林地、すばらしい森林を作っていく努力を進めております。このような努力が、人間社会全体に少しでもいい影響を与えるならばと、山村に居て

山村を美しくする委員』制度を設けています。委員は、30歳代から70歳代までと、各年代層の方々になっていただいています。

この委員の方々に、定期的に集まっていたき、色々といふ付いたことを行政に言っていたきです。地域の人達とも相談しながら、皆でいいな産山を作っていこうということを行っております。この制度が出来たことで、随分地域住民の方々の関心も高くなったのではなからうかと思っております。

今、申し上げましたことは私たちの村だけではなく、どの町村でもやっておられる事だと思えますが、なかなか小さい村ではこれくらいの事しかやれないというのが実態でございます。

光岡 ありがとうございます。森だけではなく今草原が消えつつある、こういう実情のご報告がございました。合併浄化槽あるいは生ゴミの処理については、きちんと進めつつあるといったお話をいただきました。

あと一人お聞きしたいと思

苦勞しておりますが、喜びにつながる感じがします。従って、残せる自然は大切に残していくという努力を、全国民でやっていかなければならないと感じております。

光岡 本当になるほど教えられるご意見だと思えます。次に、ボランティア活動をなさっている中村さんから最後の発言を賜りたいと思えます。

家庭汚水の取組みと 汚水処理システムの整備

中村 ボランティアのお話ということですが、私は以前から水の問題とか環境の問題に対して、人々に関心を持ってもらおうと、色々な集まりに出掛けて行ってお話をしています。

今日の会議を聞いておりまして、この分水嶺サミットというのには、都市住民が聞くべきことではなからうか、山村の人だけが集うのでなく、山村の人々と都市の人々が一緒にあって、この話を聞いていただければと先程から痛感しています。

私達熊本市民は、大変おい

います。長野県植川村長さんに一言を申し上げます。

国土保全のためには 国有林を守る事が大切

植川村土川助役 長野県植川村助役の土川と申します。

私の村では、第二回サミットを開催させていただきました。その後、引き続いてこういう形で発展したことを大変力強く感じております。私の村は、本州のほぼ中央に位置しており、太平洋に注ぎ込みます木曾川を分水嶺界といたしまして奈良井川がございいます。

また、日本海に注ぎます信濃川の最上流でもあります。木曾と申しますと、霊峰、おん岳さん、木曾節で知られているところではありますが、植川のみでなく信濃川流域を通して日本の屋根と言われる分水界でもあります。私の村は百二十五平方キロございまして、その96%が山林であります。

その山林の内85%が国有林でございます。国有林は、それぞれ国有林野事業として独立採算性をとっていて、国有林野会計の莫大な累積赤字を

しい水、日本一おいしい水道水を何十年も飲ませて頂いております。給水制限といった事態は、全く経験したことがありません。以前、福岡が渇水に悩んだ年や雨量が少ない年でも、私達は豊かな地下水の恩恵を受けて来ました。

熊本市の地下水を涵養してくれる所、あるいは水源地、白川中流域と熊本市の住民が、水問題に関して地域間のコミュニケーションを図ることが、非常に重要ではないかと思っています。

富山先生からも、山村の人達ももっと訴えて下さいという話がありました。日本の人口一億二千万人の約60%が海岸の近くで生活しています。水というのは大事な事なんです。山を守らないと大変な事になるんです。この話を、皆様に訴えていただきたいと思えます。私も、そういう切実な問題を聞きたいのです。

ボランティアの話に戻りますが、最初の頃は行政が主催する場に行つて、お話をしておりました。行政が把握している団体というのは、大変に意識が高いし保全活動も充分

と感じているところです。

光岡 どうもありがとうございます。

さいました。川を守るときには行政だけでなく、やはり民間の協力が周りにないといけません。これまでは河川行政で、なかなか民間の意見は通りにくかった面があったかと思えます。最近、建設省の態度が少し変わってきて、よく民間の意見を聞かれるようになったという実感を持っております。川を考えるのに、民間団体を入れ組織化することを考えられないか、これが第一の質問です。

第二点に、流域市町村それから住民代表などが一体となつて、川の問題を考える時に、権限をどこに集中するか、一部事務組合みたいなものを作れないものかと、私は思っています。



国土庁から参加の山岸水資源部長

今、光岡先生

からお話のありました、民間団体と市町村が組んだ形での今後の取り組みというの、私自身も非常に重要じゃないかと思えます。特に、今

おりました。素人的な質問で誠に申し訳ありませんが、国土庁からお見えですので、ご発言を賜りたいと思います。

山岸国土水資源部長 今

日は、先程から色々聞かせていただき、行政の方にもいろんな要望がありました。山の方の町長さんや下流の町とか漁協の皆さんからお話がありました。これは、国土の基本的な枠組みの問題というところでございますから、できれば閣議で議論してもらいうような、大事な問題と思うわけです。

現実には、行政も大都市の皆様もなかなか理解出来ていない状況です。ですから行政側といたしましては、一生懸命に頑張らなければいけないと思っております。

日のテーマであります。「水源地域の役割・下流域の役割」を見ますと非常に大切です。この分水嶺サミットは、いままでの大会と比べても市町村の参加数も多くなったと聞いています。

こういう皆様の熱意を受けまして、我々も頑張っていきたいと思っております。

藤野 建設省熊本工務所長の藤野でございます。

光岡先生からお話がありましたように、最近やと建設省も話を聞くようになったと言われていました。

ご承知のように、建設省の方では一級河川の担当をしております。昨日来お話を聞きながら、私共も水源地域から下流域まで流域全体を見て、考えながら河川作りを進めて



河川と関わり合いの深い建設省からは藤野熊本工務所長が発言

行かなければいけないと思っています。熊本県は、北から菊池川、白川、緑川、球磨川とございますが、昨日は菊池川の方から事例紹介がございました。先程、緑川の方のお話もありましたように、そういう形で活動が始まっていることは、大変すばらしいことだと思っております。

私は、各河川の流域におきまして、水源地域から下流域まで、各流域の市町村がそれぞれの個性を生かしながら、立場を理解し尊重し合つて手をつないで行かれるということとは、非常に意義深いことだと思っています。

先程、光岡先生よりご指摘がございました。そういった場を作るとい話については、

私共も先生方や市町村長さん、それに流域の皆様とよく相談し、出来るだけ協力していきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

光岡 どうも

ありがとうございます。河川水について流域全体で考えていこう、地元の意見も入れていこう、という方向を取っておられることがお分かりいただけたかと思えます。

実はつい最近ですけど、九州産地森林生物資源保存林第一号というのが熊本県に出来ました。先程、櫛川村助役さん、諸塚村長さんからも森林の話が出ております。相当の面積をそのまま保存するという方針が出たばかりでございます。国も、生物遺伝資源保存みたいな形で、森について考えられると思っております。そういうことで、諸塚村長さんに再び森についてのお話を賜りたいと思います。

自然の教えを教材に

災害に強い森林づくり

甲斐 今お尋ねありましたお話は、その実態と言いますか、あまり理解していませんが、環境的な立場から考えますと出来るだけ保存出来るものは保存して行く必要があるだろうと思えます。やはり全部が関心を持って努力をしていかなければならないと思

抱えていることから、赤字補填のため幾多の合理化計画が図られ、今日まで参っております。最近では、流域管理システム等が改革案として出され、目先の改革だけで進められていくというのが、国有林を多く抱えている市町村の実態ではなからうかと思えます。

これらの改革は全て現業の人達にしわ寄せが来ています。いずれにしても、国有林は独立採算性をはずしてでも守らなければならない責務が国にあるのではないかということ、第二回サミットの時も申し上げてきました。国有林を抱える自治体が、いくらその気持ちがあっても出来ないの

であって、国有林は赤字を覚悟でやるのが大切ではないかということ訴えて今日まできています。

村では、厳しい財政事情の中から、毎年二百餘の植栽事業を実施しております。国有林に考えれば、血の出るような時間とお金をかけて山を守り、水源涵養等国土保全のために、その役割を荷負っていると思ひます。

林業は、やがて外材の時代



国産材の活用を積極的に進めている長野県横川村の土川助役

をクリヤしながら、地域住民のモラルの涵養と下流域の皆様

にきれいな水を送ろうという、最上流の非常な使命感に燃える仕事を進めていきたいと思ひます。

上と、幾つも抱えている問題

から国産材の時代が来ると言

われています。自然を守るには、それを活用することが自然を守る要因になると言われています。

木曾谷地域としては、それらの林業を活性化するために、来年度、林業活性化センターを地域全体で作

り、生産されます。国産材の木材を木曾材と銘柄化したしまして、国産材の活用を高める事業を進めて

いるところでは、安易に外材に頼るのではなくて、国土保全また、今日抱えている林業の尊

さを理解いただき、国産材の活用を積極的にしてもらいたいということで、活性化センターの位置付けをし、活動を始めるところであります。

しかし、人口の過疎化、山村

村従業者の高齢化、仕事の割に収入が少

ない等、山村は大変な問題を抱えていますが、水を生産する

という使命感に燃えて、今日まで頑張っている次第です。

上流域の住民として、ソフト事業では只今もお話のございましたように、合併

槽の助成で平成元年から実施をして、現在百六十九基を設置しています。

住民運動としては、川の一斉浄化運動等をして、地域ぐるみできれいな水を、下流へ

流そうという運動を展開している次第です。平成七年度には、公共下水道に取り組むべく現在計画をしています。

これからの、住民福祉の向上と、幾つも抱えている問題

います。

しかし、四千人足らずの住民では人手や財政にも限りがございます。廃案となりまし

た水源税の創設など、国民の関心となりつつある今日こそ、その創設を一日も早く待たれるところであり

ます。長野県では、後継者育成基金というものを創設。あるいは、国有林の中でも下流域の町村の分収育林というような制度も、出つつあるように聞いております。これらのことを力にいたしまして、山林振興の活力にして行きたいと考えている次第です。

光岡 どうもありがとうございます。非常にご熱心にごいただいたと思います。他にもご発言されたい町村があるかと思ひますが、最後に時間を設けておりますので、そこでご発言を賜ります。

今度は、最上流から最下流へ移ります。熊本市の永屋さんが見えてございます。最下流に住む人間、市、町としてのその対策とか心構えについて、パネラーとしての発言

を賜りたいと思ひます。

永屋 熊本市の環境保全局におります。永屋と申します。私の立場というのは、最下流にある行政として、どうあるべきかという事を申し上げます。

まず、熊本市の概要についてお話し上げ、熊本市が現在水に關します事業として取り組んでおります事柄などを申し上げたいと考えております。

地下水を供給源としている熊本市の下水道

熊本市は、古くから森の都水の都というふう

に言われてきました。豊かな緑ときよらかな地下水に恵まれた環境にある訳です。この豊かな環境がどういうふうにして作られたのか。熊本市は、まさに今

こうやって私共がおります大阿蘇の恩恵を受けているのです。特に、水に關しては学説では三十万年前に阿蘇山が大

きな爆発をし、それから数万年おきに四回程大きな爆発をしております。それが丁度一億年前に出来たと言われてお

基盤岩の上に四重の層を作
っておりまして、丁度大きな
水ガメと言いますか非常に保
水力のある、阿蘇火砕流堆積
物があり、その水ガメの上に
熊本市を含みます十六の市町
村が乗っかっているような状
態です。何処を掘っても地下
水が湧き出てくるという状態
にあり、水に關しまして熊本
は非常に恵まれています。

熊本の水道は、年間八千数百万ℓを供給しておりますが、これは全て井戸から汲み上げた地下水を供給源としています。その外、各家庭、企業、ビルと、いろんな所で使われている水も全て地下水でございます。全国でも、六十四万人位の人口を抱える都市で、全て地下水で賄っているというのは熊本市が一番大きな都市であるということです。

熊本で生活している市民は、水に対してはあまり不自由を感じたことがありません。まあ、ぜいたくな水の使い方をしている訳です。断水の経験がありませんから、水も空気もあるのが当たり前という考え方なんです。ところが、昭和五十年代の始めに、近くの

動いたしまして、それでは私達の想い出深い緑川を上流下流と手を結んで、きれいにする運動を始めましょうということが発端になりました。

光岡先生がおっしゃいましたように、点と点を線で結んで、中流地域の人達にも声をかけて流域ぐるみの環境保全、環境保護をやるということとで結成しまして、二十二団体が参加しております。

話が元に戻りますが、下流域の漁業の後継者団体が三グループ入っております。河口域というのは、上流から流域とて来る淡水の恩恵をうけまして、海水と折り合う豊かな漁場でした。有明海の魚種は日本一豊富な所です。めずらしい魚がたくさんあります。そういう中で、恵まれた生産



パネリスト 永屋 武典氏

昭和13年10月26日生れ。昭和32年熊本
高校卒業後、明治大学政治経済学部卒
業、昭和36年熊本市市役所に入庁。昭
和56年商工課長。昭和60年東京事務所
長、平成2年地下水保全対策室長等を
へて、現在環境保全局付参事。

県庁所在都市、長崎や福岡は大変水でお困りでした。

そういう状態で段々都市化が進んで行きますと、熊本もいつまでも豊かな水に頼っている訳にはいけないというところとです。私共は、水に關して現時点を将来子々孫々に引き継いで行くことを色々考えています。

特に遡って考えて見ますと、昭和五十一年に市議会で地下水保全都市宣言をしています。やはり市民挙げて水を大切にしているという気運が、熊本でも五十年代から出て来たということです。

近年の環境問題を考えて行こうという中で、水に限らず空気や緑、その外いろんな問題が取り沙汰されています。そういうことを踏まえて、昭

和六十三年には全国に先駆け
た形で、環境基本条例を制定
しております。これも、熊本
市民一丸となって環境問題を
真剣に取り組んで行こう、対
応して行こうという表れであ
ると思います。

そういう状態の中で、熊本
市はどういう展開をやっている
かと言うと、三つの大きな
項目を持ちまして、それを中
心に取り組んでいる訳でござ
います。時間の都合もあり細
かい話がなかなか出来ません
が、紹介したいと思います。

第一点として、節水型
社会の形成。これは何処の都
市でもやっておられますが、
節水型社会は、水も限りある
資源だという考え方に立つな
らば、当然のことであります。
ただ、熊本市の場合は、潤沢

な水の使用で生活して来ておりますので、水は限りある資源ですといつても、なかなかピンと来ない面が今でもあります。

そこで、市民に對しいろんな場を通じて、水に關する啓發を行つております。特に上流の方々のご苦勞。地下水の場合、長年かけて下流域に巡りつゝいてゐる。その上流地域における皆様方のご苦勞とかを、出来るだけ市民に知つていただくという事で、小・中学生、子供達にも色々な場を通じて啓發を行つてゐるところです。

それから、水を利用する場合、合理的な水利用をしなさいという事で、家庭は勿論ですが特に大量に地下水を汲み上げる企業等に対して、クーリングタワー等の条例を設け、積極的に計画して水の循環を図っていただくような指導をしております。この外に潤沢な地下水もあるわけですが、将来のことを考えますと雨水の利用であるとか、都市では浄化された下水道水の再利用を、熊本市でも考えて取り組んでいるところです。

それから、二番目の大きな柱として、質と量、これをいかに保全して行くか。特に質に対してでございます。河川水の場合は目に見えますが、地下水の場合は目に見えません。ひとたび汚染されますと、大変莫大な経費と長い時間を費すことになるのです。

現在、熊本市内の二カ所で大規模的な回復対策をやっております。一カ所の方は、有機塩素系のトリクロロエチレンの回復対策を、環境庁・熊本県・熊本市の三者で取り組んでいます。もう一カ所は、ガソリンの漏れによる回復対策です。地下からドラムカン二十数本のガソリンが湧いて来たという非常にシロッキンクな状況です。この対策に二年以上かかっており、これもちかたりの経費になります。

特に地下水の場合は、地上のいろんなアクシデントの影響を直接受けます。しかも、全ての飲み水は地下水に頼っているという熊本市の現状からすれば、啓発と同時に未然の防止を、特に企業等を中心に徹底して行っていくということに心掛けています。これ



最下流域から海の環境汚染を説明
する天明水の会の浜辺さん

最下流域から海の環境汚染を説明
する天明水の会の浜辺さん

ました。そして、台風十九号の被害も、ものすごいものがあり、山肌は崩れ、晴天にも拘らず、そこから流れて出る水は濁りを伴っていました。

当然、濁りが最初から始まり
ますので、下流になればもつ
ともつと濁つてくる状況です
そこで私達漁民は、山を守
ろう。これは地下水の涵養に
ついて、ゆくゆくは考えなけ
ればいけないと思いますが、

まずは山を守って、豊かな水を海に流していただきたいということからお願い致しました。当然、三つの後継者グループもすぐ賛同致しまして、来春、植林をする予定で計画を進めております。

これは、営林局の造成林という事業の中に入っておりまして、植林するのに必要な費

用の65%は補助いたしました。後の35%は負担して下さい。八十年経ったらその収益組合の組合長さんたちが、若い衆がそれだけ一生懸命やってくれるんだったら、金の心配はいらないということで、バックアップしていただくことになりました。

有明海は四つの県にまたがっておりますが、私達はこの流れを外の県の若い衆にも声をかけまして、流域を逆上った上流の保安といいますが、山を守る運動を進めて行きたいと考えております。

光岡 どうもありがとうございます。

実は、熊本市にもこのボランティア団体が非常に多くございます。ボランティア団体の連絡協議会は、熊本市が担当しておられます、その熊本市が非常にバックアップされておられます。

永屋さんに熊本市が民間と

どういう関係で、水、あるいは緑、森を考えていらつしやるか、お話をしていたきたると思います。

永屋 先程、地下水基金のお話を申し上げましたが、この財源といいますのは熊本市の財源といいますのは熊本市から五年間で七億円を積み上げるということで進めております。そういう益金の中に、是非民間も一緒に協力をさせてはどうかという意見がかなりあります。いずれ、いろんな団体を通じて、県とも充分なお話をしなければなりません。民間でも企業で大口の地下水を汲み上げている企業に積極的にご参加をいただけるように考えております。

現在、いろんな活動ということでは、ボランティア団体が二十一あります。今、ボランティア団体の事務局を市で担当していますが、河川を守る会、江津湖を守る会、その外ほたるを守る会もかなり出ておりまして、それぞれの分野で積極的にやってもらえます。私共から見ても頭の下

例えば、熊本城の裾を流れております坪井川のアソビ会では自分達の川として愛しておられます。その川の中に、錦鯉等を放流しながら非常に熱心に取り組まれます。行政が、直接いろんな事業を進めていかなければならない事柄なんです。が、一人ひとりの方々が自分達の問題として、取り組んで行かれる。その輪がだんだん市民全体に広がって行くことが、水問題も含めた環境問題の一番重要なことじゃないかと思っています。

昨日も富山先生の話の中で、各家庭には蛇口があるわけなんです。が、蛇口を見て水の源流、上流域のことを色々考えるという。私は、その辺たりを行政サイドから熊本市民の皆に、強く言ってゆきたいと思っています。昨日、今日と皆様方のご意見を聞きながら、改めて流域における私共の考え方なり、意気込みをこの二日間、私自身で感じました。

そういうものを具体的に、いろんな形で民間団体の方々と手に手を取り合って、前に進んでいかなければいけない

そういう意味で、山村の人達に経済とステータスを持つていただきたいと思いますが、どうしても都市の人達の意識が変わらなければならぬ。これが結論として大きなテーマだと思っております。

山村の人達が、悩み苦しみを作りながら、きれいに送ろうと、本当に涙ぐましい努力をしておられる。私はいつも申し上げています。下流の人達、行政にですが、下水道というものは上流から作って下さい。山村で水洗トイレが無かったら、水洗トイレを作って差し上げる。それは、合併式・土壌浄化法など色々ありますので、家が離れていてもやる気があれば出来るのです。

今日は、国土庁の水資源部



アドバイザー 富山 和子氏

昭和8年群馬県生まれ。早稲田大学文学部卒業。現在評論家、立正大学短期大学部教授、日本福祉大学客員教授。水問題を森林林業問題にまで深め、今日の水、緑プームのさきがけとなった。主な著書に「水の文化史」、「森は生きている」、「川は生きている」など。

長がお見えですので、是非お願いしたいと思いますが、これは国が精力的にバックアップしていただきたいと思っております。下水道は上流から作るのが当たり前でしょう。上流がきれいになれば、下流は二重に得をするわけです。こんなに合理的な話はないと思います。そういうことすら日本全体の中では定着していません。問題点は二つあります。上流地域は、都市の人にアピールしなければなりません。自分達で世論を開拓しなければならぬという問題意識をお持ちになってほしい。そうでないと、都市の人達は意識は変わりません。

それからもう一つ、都市の方達は上流域に対する意識を広げていただきたいと思いま

す。問題意識が出れば、細かく政策もできるわけなんです。私は昨日、矢部町を歩いて通潤橋を見ました。通潤橋の近くの轟溪谷に木の橋があります。河川は県がきれいに整備されています。木の橋を渡って行ったらそこから先の整備されているところは、手すりが疑木になっているんです。私は、水と緑の町づく

りといったすてきなアイデアも、水辺の疑木では悲しいと思います。そういう所で間伐材を使い、腐ったらまた作る。そういうきめ細かなことで、水を見るお客さんが上流へも目を向けると思うんです。ちよつと気付けば、木材の需要がいくらでもあるような気が致します。

都市の人達に対するアピールの仕方もとくさんありますが、長くなりますので、二つの問題の結論を申し上げておきます。

光岡 後でゆっくりご発言いただきます。

さて、ここで次の問題に移りたいと思います。地域住民と行政の連携ですが、環境問題は行政だけでは出来ないとい

思います。地域住民とどうつながっているか、ボランティア団体とどうつながっているかです。

熊本県に、肥後の水愛護賞というのがあります。ここにいらつしやる中村さんも評議員をやっていたいておりますが、肥後銀行が二億円を出して、肥後の水愛護基金というのを作っております。私は、その常任理事をさせていただいていますが、今年で七回目今まで百団体以上に、最高五十万円から二十万円程度まで、ボランティア団体にお金を差し上げているようなところがあります。

それに限らずいろんな形でボランティアで水を守ろう、緑を守ろうという団体が非常に広がりをみえています。実は、緑川流域のボランティア協議会というのが出来かけております。

下流の漁民の方達が、一番奥の山を借りて、そこに木を植えようと展開している団体があります。その中の一つに、天明日の会がございます。今日は、天明日の会の方がお見えだと思えます。どういう気

持ちで、最下流が最上流に向けて意思表示をなさったか、ご発言をお願いいたします。

豊かな水を守るため 上流域に植林を計画

浜辺 天明日の会の浜辺と申します。私自身、漁業を営んでおります。昨年、ある環境会議におきまして、海の代表ということで、海の実情を話させていただきました。

実情と言いますのが、緑川という名前はいきれいですけど、十年前に比べてものすごい環境汚染が進んでおります。具体的に申し上げますと、十年前と今では二枚貝の生産高が、河口域の漁獲高で比較してみますと百分の一に落ち込んでいます。私がそういう話をしましたら、上流の矢部町で日頃から自然を守る運動をやっておられる自然を守る会の方達が「家庭排水は、いつも川に流れる。その川の行き着くところは海だ。日頃から海の汚染を大変心配しております。海を汚しているのは、私達上流の仕業だ」というような発言をされました。

私自身すぐその発言に感

に対応するため、検査体制の確保も着々と進めています。

水の地下浸透を推進

次に水量の保全につきまして、熊本市の水量はここ数年間横ばい状態にあります。熊本市だけでいいますと約一億四千万リットルを汲み上げていて、周りの十六の市町村も同じような状況です。そこで、連絡会議等を計画して常に情報交換をやっています。

都市化の進展が進みますと、地下に浸み込んでいく面積も減り、どうしても地下水の涵養量が減ってきます。そこで、こういった事をやればいかと言うと、上流域の植樹等が一番効果的ではないかと思われ

ます。熊本市では、平成三年二月から基金を設立し、上流域の町有林・民有林に対して、国県の補助があるものについては15%、そうでないものは50%の補助をして基金の活用をしています。ちなみに平成四年度の事業実施額は、二千七百万円を支出しております。これを更に充実拡大させていかねばならないと考えていると

ころです。

この外、水の地下浸透の問題があります。畑などのビニールハウス、特に連棟式のものについては、水を集めて地下に浸透させていくことが大事です。各家庭の地下浸透マスやビニールハウス等については、市から補助金を出しております。また、民間の駐車場や公園、公営住宅、学校などには出来るだけ地下に浸透する透水性舗装の促進を図っているところ

です。建設省では、熊本空港の近くの高遊原地域に地下浸透ダム建設計画を進められています。都市化が進み人口が増えますので、水量をいかに確保していくかという長期展望で、素流水の活用を図って行かなければならないと考えています。

三番目に水辺環境の保全があります。町の中に潤いをもたらす緑とか水が、ビルの中や町の中にあるという事は、非常に心のやすらぎを皆が感じられるわけです。県と一緒に、熊本市の親水計画を作っています。それにより都市の中に親水空間を作り、市

民のやすらぎを得ようというような試みも現在やっています。

以上、本市における水の取り組みについて申し上げました。後で時間がありましたら、具体的な問題について申し上げます。

光岡 ありがとうございます。節水型社会の形成、地下水の保全、親水計画の推移という三本の柱で進めているという話をいただきました。

後、お一人最下流からご発言を賜りたいと思います。福岡県の柳川市の方がいらつしやいますのでお願いします。

高田課長 福岡県柳川市から来ました企画財政課長の高田と申します。

柳川市は、ご存知のように北原白秋の故郷として、水の豊かな町のように見受けられますけれど、実は水の大切さを保ちながら、色々掘り割を掘って農業用水や生活用水として確保したものです。水の大切さは、行政・市民が一体となつていろんな取り組みを行っています。

光岡先生の本にも紹介されていますとおり、『柳川の水よ

蘇れ』という水問題を扱ったものがありまして、下流域として色々水問題に取り組んだものです。柳川市の源流は矢部川をたどりまして、日向神ダムという所でございます。そこに源流を發し流れる水を、過去において柳川藩と久留米藩が水争いをした経緯もござ

います。当市において色々水の大切さというものを感じているところ

です。特に、上流の町村・住民の方々には本当に感謝申し上げておると同時に大切さを痛感しているところで

す。光岡 どうもありがとうございます。私も熊本市に住んでおります。100%地下水に頼っております。今、永屋さんからお話のありました熊本市も熊本県も、この水の保全というのは非常に積極的に対策を展開されているのに対し、敬服しています。

今お話の柳川市は、舟下りなどで水が豊かで一杯あると思われているが、実態は決してそうでないというお話をいただきました。そういうこと

で今まで最上流と最下流の取り組み、あるいはご意見が出

ました。この外にも後でご意見をいただきたいと思いますが、昨日から富山先生のお話や二人の事例報告がございましたけど、上流と下流は常に連がっているということです。川は、やはり一本の線で考えなければならぬというよう

な事が出たかと思えます。今までのご発言を聞いておら

れて、一般市民の立場から、あるいは女性の立場からという

ことで、パネラーの中村幸子さんのご発言をお願いしたいと思

います。

山村・農村の問題は
国策での対応が必要

中村 ご紹介にありました中村と申します。私は、白川の下流の熊本市で生れ育っています。この阿蘇地域に降りました雨は地下へ浸透して、熊本市の水前寺付近に湧き出しますが、そこ

には水前寺公園という全国にも大変有名な水庭園がございます。その付近に住んでいます。毎朝、水前寺公園に行つて散歩をしています。近所の人々が散策に訪れ、水を飲む

人、詩吟をする人、あるいは体操をする人というのがありまして、早朝から大変にぎやかな風景が繰り広げられています。これも、阿蘇地域で降る年間三〇〇ミにも及ぶ雨の賜です。

先程、諸塚村長さんのお話にありましたように、「山村は厳しい環境下で一生懸命に木を植え付けて来ました」というお話がございました。

けれども、これが阿蘇に降った雨だと思ふものの、下流に生活している大多数の都市の住民が、そこまで考えているだろうかということを日々疑問に思うところです。

私達は、この阿蘇の恩恵を受けておりますけれども、水だけの問題だけではなくて、休日には家族揃ってドライブに出掛けます。そういった意味でも水源地というのは、水を作ってくれる所の場合であり、それから国土を守ってくれる所でもあると共に、都市の住民の貴重なリフレッシュの場にもなると思います。

先程から上流域の行政の方々のお話がありました。それを聞くにつれて、熊本市でも

非常に積極的に市民への啓発運動を行っておられます。でも、最上流の方々のお話を聞いて、今度から市民は山に来て、講座を開いて山の人の話をしてもらった方が非常に心に響くんではないか、こういうことを痛感しました。

先日私は、このサミットが開かれるということで高森町を歩いてみました。そうしますと、あちこちの山で間伐されず立ち枯れている山を見ました。そして、高森町に住んでおられる方にお話を聞いた時にとてもさびしい気がしました。後継者がいない。若い人がいなくなっていると、切実に訴えられておりました。私は、県下全域いろんな所に参ります。環境に関心を持つてもらうために、いろんな



パネリスト 中村 幸子氏

昭和29年熊本市生れ。熊本大学薬学部卒業。熊本大学医学部助手をへて、現在熊本県環境創造みなた委員会委員、県水資源策定委員会委員、財団法人「肥後の水資源愛護基金」評議員、県消費生活特別講師などを務める。著書に「わたしと水のカかわり」など。

所で話をさせていただきますが、その中で、どの山村へ行きましても後継者がいない、人がいないと訴えられます。去年、ある町に行きましたらとうとう林業の最後の後継者の方が廃業されたというお話を聞きました。その町では、林業という業種がなくなってしまうわけですね。一生懸命木を植え、国土を守り水を供給してくれる産業が無くなってしまうということです。

昨日の富山先生のお話にもありましたけれど、私はそういうことを聞くにつけて、不安になります。何とかしなければいけない。何とか山に人々が住めて暮らしが成り立つようにならなければならない。そうしないと水が無くなってしまふ。

そして、今でさえ山を歩きますと、大変不法投棄が目立つわけなんです。これ以上山から人が減ってしまったら、もっともつと不法投棄が進んでゴミだらけになるんじゃないかと心配しています。

富山先生のお話のように国産のシルクを着るとか、何でも国産の物を使うというお話のとおり、何とか下流域の住民・都市の住民は、その上流域の山で取れた物産を積極的に買い、例えば建物を建築する場合の建築材は、その上流域で取れた木を使う。そういうことを私は、これからは是非呼びかけて参りたいと痛感しました。

もつと国レベルの問題で言えば、日本は戦後高度経済成長のときに、国策でもって海辺に工業地帯を造設しました。臨海工業地帯が太平洋ベルト地帯にいくつも並んでいます。そんな労働力はどこから来たかと言いますと、山村や農村の人達です。私は、国策でもって対応しなければならぬ

と思っています。山に人がいない。山をまもる人がいないとなれば、国策で山に人々を返すシステム。山で暮らしが成り立つといった何か、お金の還元システムが出来ないものだろうかと思っています。

それから、日頃水の問題に深く関わっておりまして思うこと、これは行政レベルへの要望という形でお話したいと思います。今、熊本県も熊本市も大変水に取り組んでおられるわけですが、熊本県では安定した水の供給を目的として水資源の対策を行っております。その中に参加させていただいて思うのは、県庁内水に関係するセクションが三十五課にも及ぶわけなんです。例えば、水問題というのは林業の問題、農業の問題、商業の問題、農産物の加工業等いろんな問題が含まれてくるもので、その調整に非常にご苦労されています。

私も、水問題を市民レベルで生活者の視点から追っていますが、水問題で山はこうあつてほしい、農業はこうあつてほしいという時に、これは林野の方に行つて下さい。これは土木の管轄です。それは

農政の方と色々分野が違いますので、私が県庁を歩きますと、四階から十階、十階から六階とあちこち行かねばなりません。縦割行政というのは国レベルでも見直そうという動きがありますけれど、国レベルでも県レベルでもそういったものが顕著なものですから、お互いにセクションの方が自分のことはピシットされるわけですが、なかなか横のつながりというものを非常に希薄に感じます。

例えば、水問題で言えば関係各課から横の連携を強くしたプロジェクト委員会なるものを是非作っていただき、地域住民からの要望を、窓口を一本化して対処していただきたいと思います。

最後に植林について、日頃感じていることをお話したいと思います。

今から三年前、一の宮町の坂梨地区で町史始まって以来の大水害の惨事がありました。私は、水害が起こった直後に町の視察をしました。水の通った跡がみごとに削り取られ、建物が崩壊していました。その時、山を歩いて非常に驚

いたことがあります。それは、阿蘇の山々が崩壊していたこととです。

裸地とか幼木の山であれば理解出来るのですが、成木の山がみごとにシヨベルで山肌を削り取ったようになっていました。数人で見に行ったんですけど、木が植わっている山が何故こんな山崩れが起こったのか、皆で考えてみました。先程、諸塚村の村長さんから「モザイク模様の山だ」という話がありました。今の山は画一化しているのではないかと、同じ樹種で同じ樹齢の木が揃っているため、根の長さが同じになって、その下の地層に少し弱い所が出来るのではないかといいことでした。ですから、非常に集中的な雨が降ると、その弱い地層が滑って、山肌が崩れるのではないかという結論になったわけです。

これからは、いろんな樹種を植えていただき、いろんな長さの根で山肌の土をつなぎ止めていただくことが、大切になってくるのではないかと思います。私は先日、人吉に行つて参

りました。人吉は、二度の台風の影響で山の斜面に植えてあつた杉が根こそぎ倒れていました。林道が通っている様子はありますが、風倒木をどうやって片付けられるのかなあと思つて心配しました。そういうことを見るにつ

け、やはり適材適所と申しますか、その風土土壌に合う木を植えていくのも大切なことだと思いました。

光岡 どうもありがとうございます。今、中村さんの話の中にもありましたように、都市部に住んでいて多少水問題、あるいは山の問題に関心を持つている人間でさえ、今日山村の方からの話を聞いて、これだけの大事な発信が都市住民と山村との間には、差があるような感じがいたします。それでは、富山先生に今までの話をお聞きになって、中締めの意味でお願いします。

上流域の重要性を 下流域にアピール

富山 今まで出ました山村の人達の血のでるような思いは、一言ではまとめられませんが、とにかく人がいない

こと、これに尽きると思います。今日は水がテーマですけど、中村さんも触れておられました、山を守るというのは水を守る命のもですが、基本は土を見ればいいんです。文明の土台を全部荷負っている。環境の土台があるというふうに考えて下さればいいんです。その為には人がいる。日本列島は、人手をかけて今日まで守られて来ましたが、これが世界の奇跡と昨日申し上げました。

日本は、人手をかけたからこそ今日まで山を中心に川、平野、自然との関係でやり取りして守られて来ましたが、もし、人間が何もしないならば、消費人間オンリーで、地球全部の貯水を使い、資源が無くなってしまします。人手をかけて自然の一員となつて、サイクルの一部に入りながら木を切ったり、木を植えたりして来ましたが、しかし、今人手がいなくなり手抜列島が始まっている。一言で言えばそういうことだと思ひます。人手が欲しいのに思うようにならない。これが一つです。

私は、昨日も山村の方は胸

を張つていただきたいと申し上げました。でも、胸を張れと言われたつて、張れるような状況が無ければ張れないと思います。胸を張るには何が必要かと言うと、山村に人手が定着するような山村の経済、働き場所、お金、そういう経済的なバックアップが必要だと思っています。

それからもう一つ、山村の人があるとうと尊敬することです。ドイツでは、森林官と云うのは制服姿で車に乗つて町に出ると、パトカーなみにみんなが道を譲ってくれるそうです。ドイツの男性の1/3が森林官になりたいというところで、憧れの職業の第一位だそうです。ちなみに第二位が医者だそうです。このように、社会的・精神的に山村の方は大事にされています。

日本の場合は、そんな意識が下流域にありません。中村さんもおっしゃられたように、熊本のように上下流が近い関係でもなかなかそうではない。まして、今の世論を動かしているのは、東京・大阪といった圧倒的多数の大都市民の意識で動かされています。